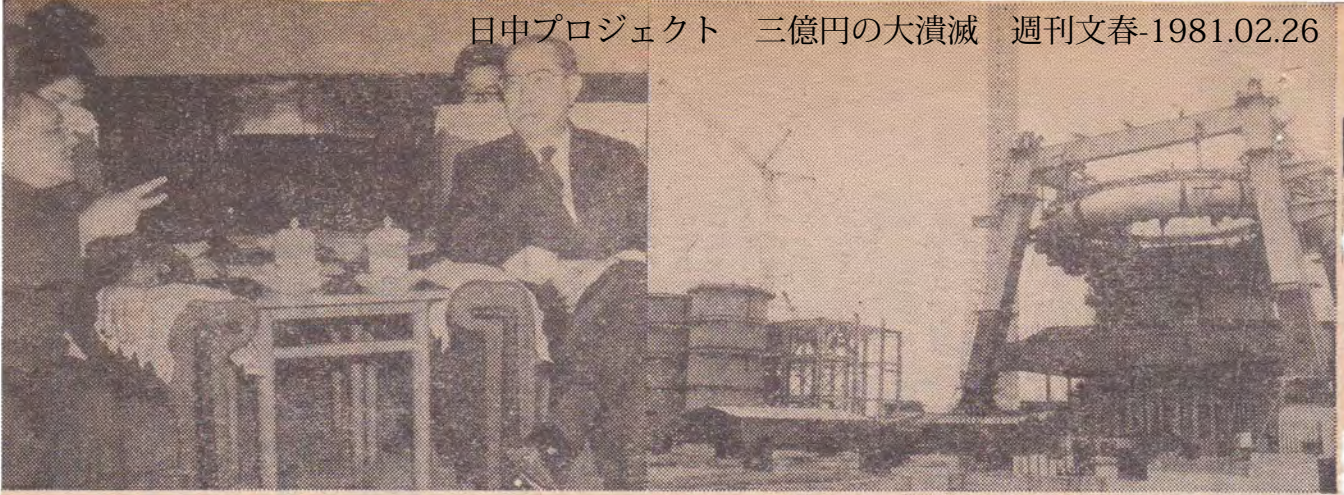




「だから言ったではないか」

日中プロジェクト 三千万円の大潰滅

戦前の反骨の新聞人・桐生悠々は、五・一五事件のとき警告を発し、二・二六事件の後、「だから言ったではないか」と嘆いた。今回の宝山製鉄所をはじめとする日中共同プロジェクトのこの潰滅、一体どうしてこんなことになってしまったのか？ 今日あるを見通して警告を発していた具眼の士もいたのに――

ある貿易業者団体の役員氏によれば、

「戦前の中国との貿易には契約書なんてなかったし、今でも華僑のあいだでは信用だけで取引が行なわれているんですよ」

この話は二様に解釈できる。

一つは「中国人というのは信義を重んじる国である」。いま一つは、「中国には契約概念が希薄で

ある」――。

前者の解釈を採用する人は、

「プラント契約破棄」という暴挙に出た中国にビックリし、後者の場合は、やっぱりと思うことになる。

結論から申し上げるなら、我が国のビジネスマンにおいては、前者、すなわち中国人を一つも二もなく信用してかかった方

中止が決った宝山製鉄所（右）と善後策を話し合う鄧小平副首相、大衆日本政府代表

が圧倒的だったのである。

「いくら中国人が近代化に力を入れていくといっても、まだ国際人になり切っていないことを今回は証明したわけです」（伊藤喜久蔵氏、愛知大学講師）

駐日中国大使館員が「たとえ

契約を破棄しても）日本の企業は輸出保険を求償すれば実損を出さずにすむんでしょ」と発言したことも、中国を国際社会の「未成年者」だと考えれば納得がゆく。

冒頭の役員氏がいう。「あちらさんは日本からの援助にしても輸入プラントにしても最先端のものを望む。東大に技術系の中国人留学生が大勢来



中国ブームの推進役、稲山嘉寛氏

日刊文春 1981.2.26

ハッピーファミリーの 安田火災です。



いい明日
のために

木安田火災海上

てるんですが、コンピュータを扱えるのは文革前に教育を受けた世代だけで、それ以降の若い人はダメにも拘らず、です。背伸びしたいんでしょうがね」

極端な話、中国の技術水準というのはこの程度——。

「スイッチ一つとってみても、ボタン式にはまだ慣れていない。あちらのスイッチはガチャンと上下に動かすヒューズ式なんです」(商社中国担当員)

ビジネスの面でも、科学技術のレベルでも「未成年」——こんなことがなぜわからなかったのか。もしわかっていれば、今ごろになって、

「先方が契約違反を犯した以上

は損害賠償するのが当然で、中国だけを特別扱いする必要がどこにある」(某大手商社・中国担当役員)と息まくこともなかったはずなのに。

ここでも結論からいえば、中国を「特別扱い」してきたのは当の経済界自身だったのだ。

「財界の方にも政府関係者にもことあるごとに申し上げてきたんですよ。中国の経済は、まだまだ日本が相手にするほどには成長していない、とね。稲山さん(嘉寛・経団連会長。前日中経済協会会長)には『それは学者の意見です』といわれまし

た」(東京外国語大学教授・中嶋嶺雄氏)

エコノミック・アニマルが、なぜ、こと中国に関してはこれほど楽観論者であつたのか。それを明らかにするためにも、まず「プラント破棄」に至る経緯を説明しておく必要がある。

今回、中国が破棄を通告してきたプラントは「上海宝山製鉄所」工事中止をいつてきたのは「南京油化コンビナート」山東

屋台骨を揺がす「石油」停滞

「いま中国にはカネがないんです。カネの算段もせずに計画を立てたともいえる。で、四大プロジェクトを切り捨てたわけですが、十カ年計画策定にあたっては復活してまもない鄧小平も相談を受けたはずなのに、それを今度鄧自身が修正せざるをえなくなつた。中国の経済はよ

勝利油化コンビナート」北京東方化工廠。これらはすべて一九七八年に華国鋒政権が打上げた「経済発展十カ年計画」にもとづいている。当時、国・省・地方の各レベルで千三百近いプロジェクトが提案されたが、そのうち約六百が現実化にスタートし、今回、右の四つが中止の憂き目にあつたことになる。

ほど切羽つまつているといえますね」(中国研究家)

国家財政赤字は、八〇年度の当初見込み八十億元が百二十、百三十億元にも膨らみそうだといわれているが、通貨発行をふやした結果、インフレに拍車をかけたことにもなった。

「インフレは自由化によるとこ

ろも大きい。企業に自主権を与えたりする一方、地方の自治権を拡大したんです。その結果、地方レベルでさまざまな工場建設を競い合い、カネが足りなくなつた。すると国家財政は赤字、インフレと、まさに悪循環が始まつたわけです。で、そのシワよせが外国の協力によるプラントの切り捨てとなつた」(元北京特派員)

カネ不足のもう一つの大きな原因は、石油生産が予想外に伸び悩んでいること。

「石油生産量は八二、八三年には二億トまでふえるだろうといわれてきたのに、ここに来てどうやら一億トも危くなつてきた。中国の基本計画は、石油を輸出してその代金で日本や欧米から工業製品を買うという「石油依存型」だったのに、石油の



上から河本通産相(当時)、矢野通商政策局長(同)



大阪心斎橋

御昆布司

松前屋

ご進物に
お土産に...

とくわか

《古伝の塩昆布》

東京・名古屋・京都・大阪
全国有名百貨店に有り

金沢	富山	高山	岡和	新潟	長崎	岡山	上野	越前
姫岡	路山	高山	島陽	湯島	百屋	百屋	百貨	百貨
倉敷	広島	島山	天天	満天	満屋	満屋	百貨	百貨
小別	岡留	戸牟	倉府	近鉄	田屋	田屋	百貨	百貨
福久	大熊	長鹿	倉府	近鉄	田屋	田屋	百貨	百貨
			倉府	近鉄	田屋	田屋	百貨	百貨
			倉府	近鉄	田屋	田屋	百貨	百貨
			倉府	近鉄	田屋	田屋	百貨	百貨
			倉府	近鉄	田屋	田屋	百貨	百貨
			倉府	近鉄	田屋	田屋	百貨	百貨

減産で目算が狂ってきたわけだ
す(同前)

つまるところ、中国経済は根本から揺らぎつつあるらしいのだ。が、財政事情は、その国民性からも好転しそうにない。

「漢民族というものは、一度タガをゆるめると元に戻らないんです。元来が自由を好む性格で、毛沢東はそれを知ってたからこそ思想優先で国民を縛ってきた。逆に鄧小平は、この国民性におもねったからこそ、自由化路線をおし進めてきたといえる。ここきて、完全失脚するかにみえた華国鋒の処遇がいまだにはつきりしないのも、毛思想の有効性を鄧自身が捨て切れていないわけだ(伊藤氏)」

——では、中国の今日を、日本のビジネスマンの中に予測した人はいなかったのか。

製鉄所一式

四千億円也

「誰もいなかったですね。だって、交渉の相手方の中国人を信用しないわけにはいかないでしょ。それにあの広大な国ですから、むこうの経済閣僚もマクロ

「だいたい人口がわからない。ある者は八億といひ、ある者は九億と発表する。ところが、公表された就学児童数から推計してみると十二億近くあっても不思議じゃない。また電話はあるのに電話帳は発行しない。鋼材が二十万トン余っているという統計と、鋼材供給が八五%不足しているというデータが同時に発表されたりもする。生産第一主義で、需要も考えずにやたら作るから、こんなことも起きるわけです。おまけに、中国の首脳

の経済がわかってなかったフシがある」(日中貿易関係者)

なんとも寒い限りではあるが、中国にマクロの経済がないというのは事実らしい。

「中国について、もっともらしいことをいうヤツには気をつけろ」という合言葉があるくらい、それほど中国の実情はわかりにくいのだ。

だがすでに二年前、少数だが華国鋒の『十カ年計画』に矛盾を感じていた人がいる。長谷川慶太郎氏(国際エコノミスト)

谷牧副首相



もその一人。長谷川氏は当時、「宝山」に関して書いている。

「新日鉄の斎藤英四郎社長が今年(七十九年)一月調印した上海製鉄所の契約書は、料理屋のツケ」という。その心は、「明細がない」である。上海製鉄所の契約もこれと同じである。近代製鉄所一式、金四千億円也」だけで、あとの明細は全くない(『文藝春秋』七十九年五月号)

こんなことになったのは、中国側の技術専門家が余りに不足していたため、見積り交渉に時間がかかると恐れ、やむなく「不見転一括契約」といになったらしいが、両国の「信頼関係」がいかに厚かったかを物語って余りある。

この「信頼」が何をもたらしたかはいまでもない。

中国高官のいうことを、日本

の企業の中国室の連中がしたり顔で復唱し、各社がしのぎを削るという図式——。日本のビジネスマンの中国認識が誤らないほうが不思議ではないか。

「一九五八年の長崎国旗侮辱事件(日本人青年が五星紅旗を引きずりおろした)で、中国は日中貿易をすべて中止したんです。が、毛沢東の真意は、大躍進政策をスタートさせるにあたって『自力更生』を貫くためにも日本との関係を切る必要があった。中国が信義を尊ぶのは、あくまでもケースバイケースなんです(中国研究家)」

にもかかわらず、中国に対するこの絶対的信頼感——。

中嶋教授(前出)が、我が国財界人の眼をくもらせた原因は他にもあると指摘する。

「一つには、稲山さんに典型的な『中国へのノスタルジー』ないしは『贖罪感』です。もう一つは、新聞の親中国的な報道姿勢。とくに日経は『鮫島事件』

(六八年、鮫島特派員がスパイ容疑で逮捕された)の後遺症が、中国寄りの報道が目立ちます。が、財界人に与える影響は無視できないですよ」

「経済界だけに限ったことじゃない。国交回復に始まる『日中

出番を待ちかまえる通産省

日中経済協会とは、日中貿易ならびに日中経済協力のあつせん役を務めるべく、通産省が財界を後押しする形で設けられた半官半民の財団法人である。これで事実上、政・財・官がスクラムを組んだことになる。

で、『四人組』の追放を経たあとの七八年二月、華国鋒の『十年計画』と踵を接するようにして『日中長期貿易取り決め』が調印された。先の『宝山製鉄所』などの大型プラント輸出契約は、この『取り決め』に基づいているわけだ。

その取り決め書の前文には、『日本から中国に技術及びプラ

友好ファイバー』の中で、冷静に分析すべきエコノミストが学界にもマスコミ界にもいなかったことが問題なんですね(長谷川氏)

思えば大変な『日中友好ファイバー』であった。

七二年、のちの刑事被告人が『日中国交正常化』を唱えて首相の座につき、その三カ月後には日中共同声明に調印。周恩来首相(当時)とは旧知の仲であった稲山氏が音頭をとり『日中経済協会』が設立されたのもこの頃である。

ント並びに建設用資材・機材を輸出し、中国から日本に原油と石炭を輸出する」と

というくだりがあるが、

「中国の石油に目をつけたのは河本通産相(三木内閣当時)で、七五年に河本が訪中して原油に関する長期協定を話し合った。これが『取り決め』に結実したとみていいでしょう(通産省担当記者)」

稲山、河本に『取り決め』調印時の通産省通商政策局長(現次官)矢野俊比古の三氏をひとは『日中貿易三傑』と呼ぶ。

「でも、肝腎の石油がアテに出来ないとなれば『三凶』といわ

れかねない。見通しの甘さでは民間も通産省もどっこいどっこいだった。そもそも通産省が『中国』に乗り出した動機が不純なんだから。貿易自由化で許認可権限が減ったもんで、主体性回復のために『中国』にワル乗りしたんですよ(通産省担当記者)

「が、どうやら通産省の出番は近いらしい。二十三日には中国技術輸入総会社の劉興華副総経理が来日、新日鉄をはじめ、契約企業と補償問題の話し合いを行なう予定だが、

「四つのプラント契約額の合計が三千億円。中国にこれを弁償する財力があれば破産などしないはず。結局、日本に輸銀融資などの要求が出される可能性があるわけ、そうなれば政府が腰を上げざるをえないでしょうね(日中貿易関係者)」

通産省通商政策局北アジア課のコメントにも、期待している風情がありあり――。

「国際慣例に従って処理できるかどうか、まず政府ぬきで話し合ってもら。交渉は相当長引くだろうし、結果的には政府が出ざるをえないとみています」

見通しの甘さの責任は企業がとるのか政府がとるのか。いずれにせよ、国民の税金による尻ぬぐいだけは、御免こうむりたい。

無駄の効用 (3)

重 兼 芳 子

煙草断ち

「願」をかけて断ちものをするのには煙草が一番都合がよい。茶断ちやコーヒー断ちもやってみたことがあるが、なんとなく手応えがなくて有難味が薄い。酒断ちは私にはつら過ぎて生き甲斐もなにもなくなってしまう。その点煙草ならぐっと我慢する度合いがちょうど手頃で、いか

にも悲壮感があり、断ちものをしているという気分浸れてとてもぐあいがよい。

今年の日本シリーズで広島が二連敗したとき私は煙草を断った。同じ敗けるのでもストレート負けではたまたまない。第三戦をテレビで視ていて私は何度も煙草に手を出しそうになった。しかし手を出そうとすれば山場がきて、この一本を吸えば味方がエラーしそうで手が出ない。第三戦をようやくものにしたとき、私が煙草を断ったからそうだったように嬉しさが倍加した。これは人に吹聴する楽しみではない。

それからも一つ私が入ってる合唱団の演奏会があった。準備のために若い人たちが走り廻っていたし、指揮者も最後の仕上げで必死になっていた。私もなにか手伝わなければと思うのだが歌詞を覚えるのが精一杯でなにもできない。そこで演奏会の成功に「願」をかけて煙草を断った。演奏会は大好評で音楽誌の批評でも絶賛だった。煙草断ちのせいだと私はとても嬉しかった。



そんなことするくらいなら煙草をやめろと言う人もいるが、やめれば願をかけるとき困る。断つものがなくなればつまらないし、病気になるたとき医者から「やめなさい」と禁じるものがなくては張り合いがないだろう。生活のなかになにか余分なものがあれば、安心していられるというのはトシのせいだろうか。

(作家)